2025 年 2 月 9 日　説教「さばいてはいけません」

ルカの福音書 6 章 33～38 節

ルカの福音書 6 章20節からの記事は平地の説教と言われます。今朝の聖書箇所は、27 節から 32 までと対をなしている感があります。その鍵となるお言葉は先週の説教題であった「あなたの敵を愛しなさい」でありましょう。そのことを覚えつつ学んでいきます。

１．罪人たちでさえ（33～34 節）

①良いことを行うことについて（33）**「自分に良いことをしてくれる者に良いことをしたからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう。罪人たちでさえ、同じことをしています。」**

32節では「自分を愛する者を愛したからといって」とありましたが、ここでは「自分に良いことをしてくれる者」とあります。その人に良いことをしても「あなたがたに何の良いところがありましょう」とあり、これは 32 節と同じです。その後の「罪人たちでさえ」に続く文節も同じです。これらは相互の愛で、神の愛を求め示しいてかなければ、神を知っている者としては十分ではないといわれるのです。

②貸すことについて（34）**「返してもらうつもりで人に貸してやったからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう。」**

一般的には、貸したものは返してもらうということが普通です。所有権を持っている者、その物を戻すということです。しかし、イエスはそのようなつもりで貸したとするなら、そこには神の愛は全うされることはないと言われようとしているのです。

③取り返すつもりなら（34）**「貸した分を取り返すつもりなら、罪人たちでさえ、罪人たちに貸しています。」**

貸してあげたことに、「してあげた」といった気持ちが支配し、それをあくまでも取り返すつもりなら、それは罪人たちもしていますというわけです。つまりは、神の愛を知らなくても普通に行われているということです。

２．憐み深い方にならい（35～36 節）

①返してもらうことを考えず（35）**「ただ、自分の敵を愛しなさい。彼らによくしてやり、返してもらうことを考えずに貸しなさい。」**

ここでまた主題の言葉がでてきます。「自分の敵を愛しなさい」。27 節と呼応します。これまで何回も出てきてい「愛する」という言葉は、アガペーという愛です。犠牲的で、見返りを期待せず、一方的な神から来る愛です。その愛に基づくならば、貸したものについて返してもらうことを考えないのです。ただ、相手の必要が満たされるならばそれで良しとするのです。

②いと高き方の子どもに（35）**「そうすれば、あなたがたの受ける報いはすばらしく、あなたがたは、いと高き方の子どもになれます。なぜなら、いと高き方は、恩知らずの悪人にも、あわれみ深いからです。」**

それではそのような愛の行為をなすことは、損するばかりなのでしょうか。いいえ、そのような人はすばらしい報いを受けるというのです。おまけに、

そのように生きることによって、その人は「いと高き方」の子とされるというのです。救いは行ないによらない（エペソ 2:9）のですが、救いが保証されるということでありましょう。というのも、愛の源であるその方は、恩というものを知らない者にも、憐みを注いでくださるからだというのです。

③憐み深く（36）**「あなたがたの天の父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くしなさい。」**

天の父は憐みの主で、どこまでも一方的な恵みの愛を注いてくださる方です。だとすれば、その方を信じる者たちも、それに真似て憐み深く生きていきなさい。そこにこそ、人知でははかり知れない神からの祝福があるということなのです。この世の法則ではなく、神の恵みの法則によって生きていきなさいということです。

３．さばかず、赦し、与えよ（37～38 節）

①人をさばくな（37）**「さばいてはいけません。そうすれば、自分もさばかれません。人を罪に定めてはいけません。そうすれば、自分も罪に定められません。」**

ここからは、神の愛を受けた者たちへの実践的教えです。「さばいてはいけません」とは、さばく人は、隣人の欠点をさがすのです。時には、それを口に出して言うのです。裁く人は自分の欠点は棚において、隣人の欠点をあげつらうのです。結果として、自分の欠点が露わになってさばかれることになるのです。人を罪に定める場合も同じです。人間は罪人です。しかし、その罪を裁くのは神です。

②赦しなさい（37）**「赦しなさい。そうすれば、自分も赦されます。」**

犠牲的な愛（アガペーの愛）の大きな証しは、先週学んだように十字架上の主のお言葉です。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは何をしているか自分でわからないでいるのです」（ルカ 23:34）。そこには、このお言葉を受けた者は、赦しを学ぶのです。そして、自分も赦そうとするのです。でも、赦せないという人に主は、「赦せば、自分も赦されるのです」と言って、赦せないでいる人の罪に光をあてています。

③与えなさい（38）**「与えなさい。そうすれば、自分も与えられます。人々は量りをよくして、押しつけ、揺すり入れ、あふれるまでにして、ふところに入れてくれるでしょう。あなたがたは、人を量る量りで、自分も量り返してもらうからです。」**

このことは既に、イエスは 30 節にあるように、与える心を教えておらます。ここでは再度、「与えなさい。そうすれば、自分も与えられます」と敵をも愛する愛をもって人に与える人には、報いがあるというのです。それも、人々は押し付けるようにして、あふれるほどにものを懐にいれてくれるという驚き。人に惜しみなく与える心を持つ者は、相手からも同じような心をもって返してもらえるのだというのです。

《結論》　イエス・キリストによる「あなたの敵を愛しなさい」という教えは、旧約聖書はもちろん、当時のユダヤの中でも同じ内容はありませんでした。27 節から 38 節の間に二回、この言葉が述べられています。そして、この教えを土台とする教えが、ここに語られています。そこには、決してぶれることのない、犠牲的で、見返りを期待せず一方的な、アガペーの愛が示されています。さながら、アガペーの愛の具体的な説明と言っても良いほどです。その中で「敵を愛しなさい」は、強烈なパンチであり、それを二回浴びせられて、教えが引き締められているのです。別の側面から、この教えを明確化している言葉があります。それは、「罪人たちでさえ、愛している」（32）、「罪人でさえ、同じことをしている」（33）、「罪人たちでさえ、罪人たちに貸しています」（34）と連なっています。罪人たちでさえ、という言葉によって、神からの愛を知らず、それを受けなくてもなすことができる愛のことを伝えようとしているのです。そして、ここでイエスが教えんとしているのは、それとは明確に区別できる愛なのです。

その愛は、割の合わないものです。日本の民法には「債務者がその債務の本旨に従った履行をしないときは、債権者は、これによって生じた損害の賠償を請求することができる」（415 条）とありますが、貸した者は返してもらえない時には賠償を求め得るのです。当然といえば当然ですし、こういう法律があるから安心して暮らせると思う向きも少なくないと思います。しかし、ここでイエスは、そうした常識とは一線を画した損得を度外視した愛をもって貸すことを教えているのです（34，35 節）。しかし、それでは割が合わずその教えを真っすぐには受け取れないという人もありましょう。「あの人にあんなに面倒をみてやったのに、いっこうに恩を返さない」といった考えをする場合もありましょう。しかし、イエスは神の愛に基づく生き方の向こう側には、普通では想像もできない祝福があることも、併せて教えておられるのです。憐み深い神は、物質的な報いもしれないし、霊的報いもしれませんが、すばらしいものを与えて下さるというのです。信仰者は、こうした愛を学び、実践しようとすることを教えておられるのです。

それに基づいて、ここでイエスは「さばいてはいけません」、「赦しなさい」「与えなさい」と具体的な勧めをなさるのです。そして、それもまた割に合わないとか、お人よしと思われてもても、祝福の道であることを約束されるのです。ここでは、「さばいてはいけません」から学びたいと思います。山上の説教でイエスは「兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかない」と裁く者達に注意し、「まず自分の目から梁を取りなさい。」（マタイ 7：3−5）と勧めておられます。教会の中にあっても、さばくことは交わりをこわします。上で教えられている神の愛を心にもって、のぞむなら、その人を受け入れ、ともに祈ろうとするでしょう（マタイ 18 章）。ヨブの友人達の言葉は「さばき」でした。私たちの教会の今年は「さばきあわない」ことを目標の一つにしたいのです。人を裁く前に、自分の目にある梁に気が付かしていただき、主の前に告白し、さばくことから解放されていきましょう。